

尚綱校創立の秘話

今回は尚綱学園の原点であった尚綱校が誕生しました頃のことをお話します。

尚綱校が済々養附属女学校として誕生したのは、明治二十一年(1888)年四月(五月開校式)のことでした。この時の入学者は二十三名でしたが、明治三十二年(1899)年には三百四十八名を数えるようになりました。

さて、この女学校が誕生するに



昇町校舎正面支那
2階は講堂、右の建物は教室(明治四十年)

あたつては、その母体となるものがありました。明治十九(1886)年頃から、済々養の創立者であり、同時に養長でもあった佐々友房の夫人静(シゲ)が、角力町の自宅で十二名ぐらいの少女たちに編物や洋裁を教えていました。翌明治二十(1887)年になって、昇町にあった普通学校の校舎(敷地四百三十五坪余、建坪三十坪)を四百三十五円で買い取り、学校らしい体裁を整えることになりました。これが母体となつて済々養附属女学校へ発展したのです。

明治二十四(1891)年十月十六日、済々養などの四校が合併して私立九州学院(同三十年廃校)が誕生し、同年十月二十四日、附属女学校は分離独立して、尚綱女学校と称することになりました。この校名「尚綱」の発案者は、当時の教頭合志林蔵でした。この言葉

は、中国の古典「中庸」に引用された「詩経」の一節にあります。昔から道徳の極致として数多くの人に愛誦されていました。

このような理念に基づいて誕生

しましたが、当初から経営はなかなか困難でした。普通学校買い取りにかかった資金も百五十円を売主からの借入金とし、残りを他から借金して支払ったものでした。経費の補助にと、教師と生徒がつになつて、養蚕を行いました。教師たちは、桑の耕作・施肥、生徒たちは桑摘み・蚕の床替えをしました。また、養蚕の季節になると、教室はおろか、校長室までも桑の葉が積みまれ、みんなで甲斐々々しく働きました。

創立当初は生徒の募集にも随分と苦労したようです。教頭合志林蔵は、はじめは済々養の関係を頼りに内藤校長とともに各地を訪れ、戸別訪問して勧誘をしていました。また、合志がかつて勤務した大分県では、かれが知己などに

生徒勧誘をお願いしています。それで大分県からの入学者も増加するようになりました。こうして次第に入学者も増加するようになりました。

今回、紹介したのは、誕生当時のほんの一部分の出来事です。もつともつと大変な苦労があったものと思います。先人の労苦を無にすることなく、私たちは二十世紀に生きる尚綱学園を構築していかなければならないと思います。



裁縫(明治四十年頃)

アメリカ合衆国第一級の 日本語・文学研究者が講じた 英語と日本古典文学の学び方

英語を自由にこなし得るようになるための英語教育と学び方、日本で生まれた漢詩短冊を題材とする古典文学と日本文化の一端が生きて語り継がれた。

わずか三時間足らずの講義が学生たちや先生方に大きなインパクトを与えた。

ラビノヴィッチ(Rabinovitch, Judith Nancy)教授は尚綱大学の試みを深く理解され、招請を快くお受け下さった。12月17日と18日の二日、

わたり、英文学科には「Is Learning a Foreign Language Just a Matter of Technique?」の課題について英語



の講義を、また国文学科向けには「平安時代の漢詩短冊の詳細」について日本語の講義がなされた。

英語の講義を受講する機会に恵まれない学生達にも良く理解されるようにと、受講者のためにあらかじめ送り届けて下さった詳細なノートに則して、平易な英語で講義が進められた。学生達の表情をうかがいつつ、時折日本語の説明を加えて理解を促されたこともあって、学生達は予期以上にリラックスして聴講できた。

講義終了後には、幾人もの学生が教壇に群れ、ラビノヴィッチ先生を囲んでこもごも質問や会話を試みていた。

また、翌日の国文学科向けの講義は、英語を母国語とする外国人



とはとても思えないほど正確で流暢な日本語で、日本固有の漢詩短冊の成り立ちと歴史を、小笹喜三氏の漢詩短冊コレクションを題材として、非常に興味深い講義を提供された。

先生自身が収集され、はるばる合衆国から持参された漢詩短冊を

資料として展示されたことも、先生の授業に対する熱意のあらわれとして受講者に深い感銘を与えたであろう。展示された漢詩短冊の実は、学生達の興味を喚起し、講義終了後も延々と質疑応答や意見交換が続けられた。

ラビノヴィッチ先生の講義は、学生達にとってきわめて貴重な経験となつたに相違ない。

ラビノヴィッチ教授 Rabinovitch, Judith Nancy

【プロフィール】

ワシントン州立大学日本語・文学科を最優等で卒業後、文部省奨学生として京都大学文学部に留学。次いでハーバード大学大学院で軍記物などを研究し哲学博士号を取得。現在モンタナ大学語学部の日本語・文学科主任教授をつとめ、日本の伝統文化と古典文学の研究のために度々来日している。

